

高橋源一郎著

一億三千万人のための

小説教室



岩波新書

786



boreas

eurus

高橋源一郎著

一億三千万人のための
小説教室

岩波新書

786

zephyrus

notus

高橋源一郎

1951年広島県生まれ

横浜国立大学除籍

現在一作家

小説—『さようなら、ギャングたち』(講談社, 群像新人長篇小説賞優秀賞), 『優雅で感傷的な日本野球』(河出書房新社, 三島由紀夫賞), 『ペンギン村に陽は落ちて』(集英社), 『日本文学盛衰史』(講談社, 伊藤整文学賞), 『官能小説家』(朝日新聞社), 『君が代は千代に八千代に』(文藝春秋)ほか

一億三千万人の小説教室

岩波新書(新赤版)786

2002年6月20日 第1刷発行

著者 たかはしげんいちろう
高橋源一郎

発行者 大塚信一

発行所 株式会社 岩波書店
〒101-8002 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5

電話 案内 03-5210-4000 営業部 03-5210-4111
新書編集部 03-5210-4054
<http://www.iwanami.co.jp/>

印刷・三秀舎 カバー・半七印刷 製本・中永製本

© Genichiro Takahashi 2002
ISBN 4-00-430786-4 Printed in Japan
JASRAC 出 0206929-201

少し長いまえがき——一億三千万人のみなさんへ

こんにちわ。はじめまして。お元気ですか？

ところで。いきなりですけど、あなたは小説が好きですか？

好きなら、よかった。あなたは、わたしの友だちです。

好きで好きで、書きたいぐらい、と思っっているなら、やっぱり友だち。

もう書いてるよ小説ぐらい、とおっしゃるなら、当然、友だち。

「あの、興味はないけど、とってみたいな芥川賞。これでも友だちになってくれる？」

はい、もちろん。

小説、という言葉が、あなたのところやからだのどこかにひっかかっているなら、それだけで、わたしはあなたと友だちになれる自信があります(でも、実際のところ、友だちは少ないですけどね、わたし)。

このあいだ、確かめたところでは、わたしの書斎の本棚には「小説の書き方」「小説教室」「小説はどうやって書くか」「小説家になる方法」「新人賞のとり方」「作家になるには？」といった、小説を書くための、もしくは、小説家になるための本が、三十一冊ありました。「SF作家入門」や「ミステリーはこう書け」といった、特定の小説の分野の書き方を教えるためのものを加えると、ざっと五十冊にもなりました。

もちろん、世の中にはその何十倍も、あるいは何百倍も、こういった種類の本があるにちがいありません。すごい！

わたしは、この『一億三千万人のための小説教室』を書く前に、それらの本をまとめて読んでみました。そして、その中には、確かに、立派なことが書いてある本、読んでおもしろい本もありました。けれども、わたしはこう思ったのでした。

すなわち、

——そういった本を読んで、ほんとに、小説を書けるようになったりするのだろうか、と。

「そういった本」を読んでいると、わたしは、なんとなく、「競馬必勝法」の本を思い出す

のです(あと、「金持ちになる方法」の本とか「美人になる方法」の本とかも)。

本屋の「ギャンブル」の本、もしくは「趣味」の本のコーナーに行ってみてください。

そこには、たくさん「競馬必勝法」の本が置いてあります。もしかしたら、一つおいて隣のコーナーには「小説の書き方」に関する本も見つかるかもしれない。

どっちも似たような本だからかな。

「競馬必勝法」の本の中で、それを書いた人は「こうすれば馬券が当たる」とか「わたしはついに馬券中の必勝法を見つけた」とかいつています。しかし、ほんとにそんなに当たるのだったら、自分だけの秘密にして、他の人間になんか教えたくない、というのが人情というものではないでしょうか。

そりゃ、そうですよね。

「小説を書く方法」を知っていたら、まず自分で小説を書いてみるはずです。他人に、小説の書き方を教える必要なんかありませんか。だって、先生じゃないんだから(あつ。みんな、自分では先生のつもりなのかも)。

実際、わたしの知っている限り、「小説教室」や「小説の書き方」を読んで小説家になつた人はひとりもいません(人は、まるで約束されていたみたいに、自然に小説家になるよう

に見えます——そのことは、レッスンが進むにつれて、おわかりいただけると思いますが。それはいったい、なぜでしょうか。その理由は、次の二つのいずれか、もしくは両方だと思われまます。

④ その本を書いた人は、ほんとうは「小説の書き方」を知らないから

⑤ その本を書いた人は、「小説の書き方」を知ってはいるが、教え方がわからないから

④の場合、その本を書いた人は、そもそも、「小説」がどういうものなのか、わかっていない可能性が高いようです。ですから、その書き方がわからないのも無理はありません。たいていの「小説の書き方」はこれにあてはまります。

⑤の場合、その本を書いた人は「小説」がどういふものなのか、なんとなくわかっていません。この場合、その人は小説家だと断定してもかまわないでしょう。しかし、惜しいかな、その人は「なんとなく」小説を書いているだけなので、ほんとうのところ、書き方も知らないし、それゆえ、教え方もわからない。

もちろん、世の中には、「小説」とは何なのかよく知っている、そして、その書き方も知

っている人(当然、小説家)だっています。しかし、そういう人は、なかなか「小説の書き方」を書いてくれません。なぜなら、その人は自分の小説を書くのに忙しくて、他人にその秘密を教える暇がないのです。あるいは、せつかく発見したその秘密を他人に教えるのがイヤなのです。

かくして、わたしたちの周りには、役に立たない「小説教室」ばかりが生産されるようになったのです。

ところで。

実は、わたし、《「小説教室」や「小説の書き方」を読んで小説家になった人がひとりもない》理由について、もう一つ、答えを用意しているのです。

即ち、その答えとは、

◎ 小説家は、小説の書き方を、ひとりで見つけるしかないから

——というものです。

ガツカリしましたか？

真実というものは、知つてみると、たいていガツカリします。身も蓋もない、という感じ、だからです。

この「小説家」の代わりに、「音楽家」や「画家」や「数学者」や「建築家」ということばを入れてみてください。みんな、あてはまっちゃう。ほんとに、真実って味気ない。

人間は、だれだって、はじめのうちは、なにごとにおいても素人です。だから、自分から進んで、というよりは、社会がそういう具合にできているので、周りの人たちからいろいろ習わなきゃならない。先生のおっしゃるとおり、どんどん前へ進んでいく。そして、分かれ道に来るたびに、先生が、「はい、こつち」とか「そつちじゃない、右！」と教えてくれる。けれど、どれほど知識を仕入れても、どれほど技術を学んでも、教えられるだけでは、先には進めなくなるところにやって来ます。

それが小説であろうが、音楽であろうが、はたまた、「人生」というような、およそ作品とはほど遠いものであろうが、その人に用意された道は、最後にはたった一本になってしま

います。

頼れる先輩も、助けしてくれる先生もない。すべてを自分で切り開かなければならない、その人だけの道が目の前に現れる。

そんな、その人だけの道を、どうして他人であるわたしが見つけ、教え、さらにその先に導いていけるでしょう。なぜなら、わたしもまた、自分専用の道があつて、その道を進んでゆくだけで精いっぱいなんですから。

小説の書き方だつてそうです。

すべての傑作といわれる小説は、その小説家が、最後にたったひとりでたどり着いた道、その道を歩いて行った果てにあります。そんなのを書く方法なんか、だれにも教えられないわけがない。

えっ？

「いや、わたしは、そんな傑作を書こうと思つてるわけじゃありません」つていうんですか？

「とにかく、小説というものを書いてみて、ちよつと誉められて、あわよくば、どこかの新人賞でもとつてデビューできれば御の字」だと。

気の毒ですけど、それ、まちがってます。

だいたい、世間で出回っている小説のほとんどは、小説以前、「小説のようなもの」です（まあ、小説のスゴイところは、「のようなもの」も含んじやうところではあるのですが）。わたしは、みなさんに、そんなものを書いてもらいたいとは思わない。そんなものを目指し必要なかありやしない。そんなもの、「お仕事」でやってる、毎回同じようなものを書いて、とりあえず読者の目を誤魔化しときゃいいと思ってる、小説家の人たちに任せときゃいいんです。

わたしが、みなさんに、書いてもらいたいもの（いや、これは傲慢な言い方でした。わたしが読みたいもの、と言い換えましょう）、それは、あなたが最後にたどり着くはずの、あなたひとりだけの道、その道の向こうにあるものです。

それは難しいことでしょうか？

確かに、難しい。

なぜなら、絶対にそこに行けるといふ保証は少しもないから。

でも、難しくないとはいえる。

なぜなら、その道はあなた専用で、いつだってあなたが来るのを待っているから。

わたしがこれから書くようにしている「小説教室」は、そんな、他のすべての「小説教室」や「小説の書き方」とどこがちがうのでしょうか。はたまた、ほんとうにちがったものなのでしょうか。

そのことを述べる前に、自己紹介といきましょう。

わたしは小説家です。

本屋さんに行けば（ただし、なるだけ大きな本屋さんにしてください、お願いします）、わたしが書いた小説が置いてあることから見て、その点は断言していいでしょう。

ただし、わたしの小説は、まちがえてスポーツ書のコーナーに置いてあったり（タイトルが『優雅で感傷的な日本野球』だったので）、文学史のコーナーに置いてあったり（タイトルが『日本文学盛衰史』だったので）、音楽書のコーナーに置いてあったり（タイトルが『ジョン・レノン対火星人』だったので。この本はSFのコーナーに置いてあったことありません）。それなら、当たらずといえども遠からずです）します。

中には、アダルトビデオのコーナーに置いてあったり（それは『あ・だ・る・と』というタイトルの小説でした。最近では、本屋とビデオ屋を兼業しているところもあるので）するものもあります。

けれども、まちがいでなく、わたしは多くの小説を書いてきました。

わたしの書いた小説にどの程度の価値があるのか、その点については、わたしの口からはなんとも申し上げられません。しかし、一ついえることは、わたしぐらい小説が好きな小説家は滅多にいないのではないかということです（えへん）。

もちろん、小説が嫌いな小説家はいないはずですが（たぶん）。でも、時々わたしは、自分が常軌を逸して小説が好きな人間ではないかと思うことがあります。

わたしはこの四十年ほど、ほとんど毎日、小説を読んできました（小説だけではありませんが）。あらゆる時代のあらゆる小説を。そして、結局、小説を書くことを職業に選んだのですが、ただ小説を書くだけでは満足できなくなったのでした。

小説を書きながら、相変わらず、他の作家の書いた小説をどんどん読み、また、ただ読むだけでは満足できず、この小説はどう書かれているんだろう、と何度も読み返し、古い時計を分解するように細かい部品にまで分解して、一つ一つの部品を点検し、それから同種の他

の小説とチェックしたりしました。

どうやったら、その小説のような小説が書けるようになるのか、自分でそっくりに書いたりもしました。

そして、その小説家のことがわかったと思うと、また別の小説家の小説を読み、点検し、分解し、それから再び組み立て、また別の小説家に向かいました。

おそらく、わたしは日本でいちばん、小説についてあれこれ、いろんなことを書いている小説家ではないでしょうか。

そんなことをやっておもしろいのか、あるいは、そんなことをやっている暇があったら、自分の小説を書いたらどうかといわれても、止めることができない。

それは、小説というものがあまりにおもしろいものだからです。

わたしは、自分の小説を書いている最中だって、頭の中では、その時書いていることとは別のことを考えてしまう。

たとえば、

——小説というやつはいったいどういうものなんだろう、どうしておもしろくなったり、お

もしろくなくなったり、売れたり、売れなかつたり、傑作になつたり、駄作になつたりするんだらう、詩や短歌や俳句や戯曲やエッセイとどう違ふんだらう、マンガやゲームとどう違つてどこが優れていてどこが劣っているのだらう、と、まあ、そんなことばかり、つまり、小説のことばかり考えてしまう。

そして、ついにわたしはこんな結論に達したのです。

「小説教室」や「小説の書き方」を読んでも小説を書けるようにならない最大の理由は（厳密にいうなら、「小説のようなもの」しか書けるようにならないのは）、その著者の目が「過去」を向いているからです。その著者が例をあげている作品、引用している作品、そして読者に向かつて、こんなふう書きなさいと推奨している作品が、どれも「過去」の小説ばかりだからです。

もちろん、わたしは「過去」の小説がダメだといっているわけじゃありません。

そんなことをいうわけがない。だって、わたしが、こんなにも大好きな小説は、みんな「過去」の小説だからです。そして、もちろん、わたしの小説は「過去」の小説を読むことによつて生まれてきたのですから。

しかし、同時に、小説には非常に不思議なところがあります。それは、小説というものが、

いちばん深いところで「未来」に属しているということだ。

伝統芸というものをご存じでしょうか。たとえば、歌舞伎とか、落語とか、そういうやつ。そこでいちばん大切なのは、古い演目をどうやって新しく（というか、ちよつと味付けを変えて）演じるか、ということだ。

もちろん、歌舞伎や落語にも「新作」は存在します。けれども、わざわざ「新作」と銘打たなければならぬほどに、ほとんど「旧作」ばかりというのが実態なのです。伝統芸の世界でたいせつなのは、それをどうやって「再演」するか、ということであつて、新しい作品を作りだすことではありません。

では、音楽はどうでしょう。

クラシックと呼ばれるジャンルはその名（クラシック＝古典、です）の通り、歌舞伎や落語のように、「新作」より、ベートーヴェンやモーツァルトといった「古典」の「再演」が中心です。空前のヒットとなった小澤征爾さんの「ニューイヤークンサート」だつて、別に新作ではありません。百五十年ほど前の（日本でいうと江戸時代の）作曲家であるヨハン・シュトラウスの、当時のヒット曲を中心に、もう一回演奏し直したただけです。

なぜ、クラシックと呼ばれる分野ではそんなことが起こるのでしょう。クラシックに「新作」(変な言い方ですけど)はないのでしょうか。

いや、そこには、ちゃんと「現代音楽」と呼ばれる「新作」が存在しています。けれども、哀しいぐらいにヒットしない。ごく少数の「現代音楽」ファンを除けば、だれも興味を持たない。ふつうのクラシック音楽ファンは、まるで耳を傾けちゃくれないのです。

この問題に深入りすることは避けましょう。

ただいえるのは、「現代芸術」のあらゆる分野で、同じことが起こっているということですよ。そして、たいていの、ふつうの、圧倒的多数のファンが、「昔のものの方がいい、気持ちいい、楽しい、安心できる」といい、また「新しいやつは、なんか難しい、なんか楽しくない、なんか勉強しなきゃならないみたいでイヤ、なんかわからない」といって、古いものの「再演」を求めるようになってしまったのです。

さて、小説の場合はどうなのでしょう。

クラシック音楽のように、古いものもいい、そっちの方が安心して読めるよ、といった声も存在しています。

たとえば、いま生きているどの作家より、夏目漱石や太宰治の方がずっと有名で、ずっと